

Ayşe Gül Altınay,

The Myth of the Military-Nation : Militarism, Gender, and Education in Turkey.

New York : Palgrave Macmillan,
2004, xi+206pp.

木村周平

I

『軍事国家^(註1)の神話』と題された本書は、1990年代後半以降、政治経済的な小康状態や市民社会の拡大などを背景に活発化した、現代トルコの社会生活における「政治的なもの」を分析する研究群のひとつとして位置づけることができるだろう。従来、トルコを対象とした社会研究といえば、イスラームやジェンダーの問題が中心であった。しかし本書は軍という、重要ではあるが議論しにくいテーマを扱っている。その意味で本書は貴重な研究であるといえる。

著者のアルトゥナイはデューク大学で博士号を取得した人類学者で、現在はイスタンブルにあるサバンジュ大学の人類学およびカルチュラルスタディーズの助教授である。本書のほかに、トルコ語での『母国・民族・女性たち』[Altınay 2000]という著書もある。彼女が本書において、共和国成立期を中心にした歴史資料や聞き取り調査で得た民族誌的データの分析を通じて明らかにするのは、トルコで生きる人々にとって、軍やミリタリズムは、社会の外部から社会に影響を与える存在なのではなく、国家というものを取り巻いて、ナショナリズムや歴史、教育、ジェンダーなど様々な言説や実践の諸領域のなかに根を張り、そこから逃れることが困難な、そして多くの場合それを問題だと考えることもなくさせてしまうような、ひとつの生の条件を形成している、と

いうことである。本書の目的はこうした状況についてのひとつの見取り図を描くことである。その試みがどれほど成功しているかは議論の余地があるが、特に第2部、第3部で提示されるデータは現代トルコ社会の研究者にとって興味深いものであるだろう。

II

本書はイントロダクション、各々2章からなる3部計6章、および短いエピローグで構成されている。目次は次のとおりである。

イントロダクション

第1部 軍事国家

第1章 軍事国家という神話

第2章 女性たちと神話——世界初の女性戦闘パイロット——

第2部 兵役

第3章 男性になること、市民になること

第4章 あまり通られていない道——兵役への挑戦——

第3部 軍事化教育

第5章 「軍隊というものはひとつの学校であり、学校というものはひとつの軍である」——国家の2つの前線——

第6章 現在を沈黙させる——学生—兵士と司令官—教師の教室での出会い——

エピローグ

以下、各章の内容について簡単に紹介する。

イントロダクションでは本書の問題の所在と理論的背景が示される。著者は「トルコは軍事国家である」、「すべてのトルコ人は兵隊に生まれる」、あるいは「軍事文化」(military culture)という言葉がトルコ社会において何の問題もなく現在でも用いられていることに読者の注意を引く。その上で著者は、こうした軍とネーション、および軍と文化の結びつきが1世紀に渡る諸実践と諸言説からなる人工物であることを示し、それら諸概念の絡み合いの見取り図を描くのが本書の目的であると述べる。こうした議論の背景には、近年の学問的動向、つまりフェミ

ニズムと軍についての研究の蓄積と、ネーション研究における文化の重要性の強調がある。

続いて第1部では共和国成立時における国家と軍、および女性の問題が扱われる。第1章は共和国成立期を中心とした歴史的な資料の分析から「軍事国家」という観念が生み出され、定着する過程を跡づける。「軍事国家」という語はオスマン帝国時代の1860年代の文章にも表れるが、これを現在まで生き続ける概念にしたのは紛れもなくアタトゥルクである。著者は、独立戦争から共和国成立期の政治的状況のなかで、アタトゥルクが養子であるイナンとともに、トルコというネーションを政治的・理論的に作り上げていったこと、その過程でトルコ中心主義的な歴史観（「トルコ歴史理論」と呼ばれる）や、その歴史を作るネーションとしてのトルコ像に含まれる軍事国家という概念がトルコというネーションと不可分なたちで定着していったことを説明する。

第2章は、ジェンダーを副題としてもつ本書において最も正面から女性の問題を扱う章である。ここではアタトゥルクの養子で世界初の女性空軍パイロットとなったサビハ・ギョクチェンの自伝が主な分析の材料とされる。彼女の華々しい人生に象徴されるように、トルコではアタトゥルクのもと女性は男性と平等な立場が与えられていた、といわれてきた。しかし著者は、ギョクチェンがきわめて特異な存在だったことを指摘し、実際には女性たちの権利を求める戦いが国家によって沈黙させられていたということを示す。

第2部では兵役が中心的なテーマとなる。第3章では兵役の経験が論じられる。著者は兵役の現場を調査できなかったため、材料となるのは兵役を終えた人々を中心とした様々な「語り」である。そこで著者はフーコーを援用しつつ、兵役がもつ教育あるいは訓育という機能について論じる。兵役は規律や文字通りの暴力によって、社会発展にとって有益な身体を、そしてまた「兵役を終えないと一人前の男になれない」といわれるように、「男性」というものを作り上げる。それゆえ、兵役はジェンダー不平等を再生産したり、そこからみ出す人々を排除したりする機能もはたす。本章ではまた非ムスリム・

トルコ人の兵役経験や、兵役を務めるなかでの差異（入営を遅らせる大学生や金持ち、前線に送られる農民など）、前線を経験した兵の苦悩 [Mater 1999] などにも言及される。

第4章では良心的兵役拒否と反戦主義の問題が扱われる。こうした動きがトルコに現れたのは1990年代後半であり、まだきわめて新しい存在である。著者は反戦者協会 (SKD) の活動、およびオスマン・ムラット・ウルケ (Osman Murat Ülke) とメフメット・バル (Mehmet Bal) を中心とした兵役拒否者のライフヒストリーを丹念に記述し、社会に深く浸透したミリタリズムに抵抗することの困難さについて論じる。

第3部のテーマは、教育と軍隊、国家のかかわりである。トルコにおいて軍と学校は国家にとっての2つの前線だという言い方がされることがあるが、ここでは軍の教育的機能を示した第3章に続き、学校に入り込むミリタリズムが記述の対象となる。

第5章では高校の国家安全保障の授業で用いられる教科書が分析される。トルコでは建国以来、高校で国家安全保障の授業が継続して行われ、またその授業は必ず軍人によって担当されてきた。このこと自体がきわめて注目すべきことであるが、著者はこの教科書の分析を通じて、第1章で示された、アタトゥルクによって作り上げられたトルコのネーション像が、それと言及されないままに連綿と受け継がれていることを明らかにする。そしてもう一点、著者が注目するのが、1998年版における転換である。そこでは「兵役」が論じられなくなり、授業において学生たちは現代政治について討論させられるようになる。この転換が、第6章でみるように授業経験の多様化を引き起こすことになるのである。

第6章では国家安全保障の授業の経験が扱われ、著者は西部の大都市から「非常事態」が宣言されている東南部の町まで、様々な語りを提示する。ここで示されるのは授業の経験が、その人が置かれた立場によって様々に異なるということである。とりわけ著者が熱心に語るのがクルドの学生たちの経験だが、彼らは軍人である教師と対面し、一方的な政治観を押し付けられることによって、政治問題につい

て沈黙するという振舞いを身につけ、自己嫌悪を内面化する。このように、教師である軍人によって統制された政治的な討論を通じて、トルコに対する「神話」が維持されてゆくのである。

III

本書を読んで思い出したのは、評者がイスタンブル滞在中に同居していた親しい友人のことである。当時彼は大学生であったが、卒業する見込みがなく、かといって大学を辞めれば即兵役行きになるので、2年ほど留年を続けていた。大卒の場合兵役は半年で済むが、高卒以下は15カ月になる。そのため彼は何とか大学を卒業できるよう手を尽くしていたが叶わず、最終的に大学を辞めて兵役に行った。兵役に行くにあたって彼がいったのは、「母国に対してトルコ人としての義務を果たそうと思う」ということだった。評者にはこの言葉はとても印象的だったが、しかし、実は第3部で扱われる教科書の文面とほとんど同じものだったのである。

このような、軍と国家、ナショナリズムを一体として神聖視するというような言葉遣いや振舞いは、著者も第1章で指摘するように、至るところで目にすることができる。本書はこうした現象を引き起こす仕組みについて、理解しやすい見取り図を示している。それは、エピローグでの著者の言葉を借りれば「トルコというネーションは『軍事国家』として発明された。兵役義務、義務的な軍事化された教育はこの発明品を支え、それを強化してきた」ということである。この点において本書は、第3部で示される高校の授業がもつ「神話」の維持機能にどの程度の重要性を置くかなど、具体例の選択に関しては議論の余地があるにせよ、ナヴァロン・ヤーシン [Navaro-Yashin 2002] に対して与えられた、国家についてのイデオロギー（幻想）がどのように形成・維持されているかを十分に議論していない、という批判 [澤江 2003] を越えて議論を先に進めているといえる。

しかし、こうした本書の主張に対して評者が感じたのは、言いがかりのように聞こえるかもしれない

が、少し理解し易すぎる、という物足りなさである。つまり、誰もがそれとなく認識している問題を、誰もが予想のつくやり方で説明したようにみえるということである。権力やナショナリズム、あるいはフェミニズムの分野において、フーコーやベネディクト・アンダーソンらの議論がすでに古典となっている現在、理論的な面からみれば、本書はすでにある議論に対して何か新しい見地を示すというよりは、既存の枠組みを使って事例をひとつつけ加えるものに過ぎない。批判すべき点をさらに挙げるなら、著者が自分で得たデータを扱う第2部、第3部において、個々の記述は生き生きしているものの議論の枠組みが弱く、興味深いが拡散しがちな語りを十分に掬いきれていないこと、第2章を除いてフェミニズムの視点が十分に生かされず、軍の問題からの女性の欠落を指摘するのみになっていることも残念であった。

しかしこうした批判はおそらく的外れなものであるだろう。著者の狙いは、本書の末尾に示される「トルコの学者は軍や政府という仮面の下に隠された様々な矛盾を問ひ質し、また軍事国家の神話を生み出し維持させてきたメカニズムを分析するべきだ」というメッセージにあるように、理論的に新しいことを述べるというよりは、トルコ国内における議論の活発化、さらには現在の政治的状況のなかに沈黙させられている人々に声を与えることにあるだろうからである。その意味で本書は政治的な意図をもつ書だといえる。ネーションの虚構性が盛んに論じられた時、よくいわれたのは「虚構性を指摘したからといって民族紛争はなくなるわけではない」という批判であった。トルコでも同様に、おそらく多くの人々は（著者の主張に反して）こうした考え方が神話であると知りつつも、それを生き、実践している。強いトルコという観念は、ある人々にとってはきわめて暴力的で有害なものであるが、同時に少なくとも人々にとって生きていく上で必要な観念であるというのも、また確かなのである。その意味で、この観念が生き延びていく過程には、アルチュセールの意味での「呼びかけ」に対する応答という、受動的な関係だけでなく、より複雑な相互作用や共犯関係

があるだろう。

それゆえ必要になるのは、本書のように、この「神話」の暴力性と、そこからはみ出してしまうことが引き起こす様々な差別について声を上げ続けていくことと同時に、多くの人々が「神話」に取り込まれてゆくプロセスについても目を向けることであるだろう。さしあたって前者に関して著者が示した、クルドや反戦主義、非ムスリムなどのマイナーなものに対する注目は重要であり（おそらくクルドの表象は著者にとってひとつの重要なテーマである）、評者は著者の試みを評価したい。その上でこうしたテーマに関する研究がさらに進んでいくことを期待する。

（注1）本稿ではmilitary-nationを便宜上「軍事国家」と訳しているが、当然このnationには民族という含意もある点に注意されたい。以下、日本語として無理がない限り、nationはそのままネーションと記述する。

文献リスト

<日本語文献>

澤江史子 2003. 「書評：Yael Navaro-Yashin, *Faces of the State : Secularism and Public Life in Turkey*」『アジア経済』第44巻第9号 78-83.

<外国語文献>

Altunay, Ayşe Gül 2000. *Vatan-Millet-Kadınlar*. Istanbul : İletişim Yayınları.

Mater, Nadire 1999. *Mehmedin Kitabı : Güneydoğu'da Savaşmış Askerler Anlatıyor*. Istanbul : Metis Yayınları.

Navaro-Yashin, Yael 2002. *Faces of the State : Secularism and Public Life in Turkey*. Princeton and Oxford : Princeton University Press.

（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）